

1. 担当 PM

首藤 一幸（東京工業大学 情報理工学院 准教授）

2. クリエータ氏名

奥野 茜（公立はこだて未来大学）

3. 委託金支払額

2,162,400 円

4. テーマ名

一人称ライフログ映像からの顔検出に基づいた社会活動量計の開発

5. 関連 Web サイト

<http://kaosukei.html.xdomain.jp/>

6. テーマ概要

人の顔とどのくらい接したか、に基づく社会活動量計を作る。身体の前面にカメラを装着し、撮影画像から人の顔を検出し、その数と面積から、社会活動量を算出する。また、過去の社会活動量を、時間軸に沿って可視化し、提示する。

7. 採択理由

1 日、1 週間、人とどれだけ会話したか、向き合ったかを測定する、いわば社会活動量計を開発した。これを使うことで、家族・友人・同僚などとの関わり方を見直すことができ、よりよい家庭／社会生活を得られる。どう測るか？測定結果をどう見せて、どう今後に影響を与えるか？といった課題があった。

言うまでもなく我々は社会つまり人との関係の中で生きており、関わり方やその量は心身その他に大きく影響する。この提案は、便利さよりは、（奥野氏自身を含めた）人が幸福に暮らすことを目指しており、当 PM としてはこの点に得難いものを感じており、期待する次第であった。

8. 開発目標

上記社会活動量計のための、装着型の撮影装置、集計機構、可視化ツールを開発する。また、顔が写った画像を元に社会活動量を算出する方式を検討し、開発する。

9. 進捗概要

上記の通り開発し、さらに、大学研究室のメンバ数人による試験利用を行った。

10. プロジェクト評価

開発は伴うものの、研究という色合いが強いプロジェクトであった。その場合、PMの立場としては、何をもってプロジェクトの成果物とするか？ソフトウェアなのか論文（すなわち新しい知識）なのか？にいつも悩む。未踏においても人材の多様性は重要であり、開発や事業創出だけが目指すゴールではないが、大学における研究と同じことをするだけでは未踏プロジェクトである意味はない。

本クリエイタは、研究で最低限必要となる範囲を超えて、撮影装置やソフトウェアの開発・発展にかなりこだわった。

本プロジェクトは、クリエイタにとっては大学院での研究テーマでもあり、社会活動量を測定する新しい手法の研究であった。成果物として、撮影装置や集計・可視化ソフトウェアを産んだ一方、本質的な成果は、身体前面から撮影した画像と社会活動量の関係や、その算出方法といった新しい知識である。したがって、クリエイタ自身が、利用容易なプロダクトまで開発する必要があるはずでもあるわけではない。本プロジェクトの場合、撮影装置（の作り方）やソフトウェアは、研究室の後輩に引き継ぐとのことである。

11. 今後の課題

画像に写った顔と社会活動量の関係、という知識の社会での活用